

静岡県現地支援調整本部派遣者報告書（第12次隊員）

所 属 市民協働課

職氏名 主査 和田 まゆみ

第12次派遣者 25名（県職員14名 市町職員11名）

指揮班、本部詰め、遠野市班 県職員8名

山田町班 9名（県職員2名、市町職員7名）

大槌町班 8名（県職員4名、市町職員4名）

「地震だ 津波だ すぐ避難！」

「かっぱ伝説」や「民話のふるさと」として全国に名だたる岩手県遠野市。県の内陸部に位置するこの市と隣接する上閉伊郡大槌町。日本の原風景を彷彿とさせるこの遠野から大槌への川沿いの山道を抜けると、一面瓦礫の山が河川敷や田畑に広がり、壊れた家屋や車の残骸が未だに犇めき合い、道路だけがきれいに整備されていました。

現地での支援業務がわからないなかで、決して若くない自分でも何か役立てることはないか、担当業務の沼津市男女共同参画第三次基本計画にも掲げている「男女の異なるニーズに配慮した防災体制づくり」という施策の検証が、応募動機となりました。

現在の担当業務は、私が不在でも前任者の現課長が在籍されている、という強い後ろ盾が一番の後押しとなり、さらに優秀なスタッフや同僚に恵まれていること、成人しそれぞれが公務員である息子たちの支援への志と、課員から託された支援の気持ちを被災地に届けるため、9泊10日の任務に就きました。

今回の派遣に躊躇されている方のなかには、割り当てられる業務内容が直近まで不明であることが、最大のネックとなっている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

瓦礫の撤去等は自衛隊や解体業者等が担い、私たちは一般事務の日常的な処理または今回の災害で発生した業務である支援物資の配給や義援金、仮設住宅の申し込み受付等の生活支援業務の遂行でした。ですから、誰にでも出来る業務なのです。

2011.9.11から様々な場面での危機管理が叫ばれ10年が経過するなかで、あの日この市庁舎で体感した今までにない長い横揺れ。その後、テレビから何度も何度も繰り返し放映された津波による被害。

これまでは海外での津波被害状況しか見たことがなかったので、あの日映像はまる

で映画のワンシーンのようでした。先を走る車に追いつく津波の波柱。家屋やビニールハウス、田畑を覆いつくし、数十分前までの日常の全てを舐め尽くすように、津波は細部にまで入り込んで行きました。

映像はその場面のひとコマを切り抜いていますが、現状の全てを実際に目の当たりにしたとき、荒涼と広がる被災地の姿は、私たちに自然の驚異と人間のはかなさ、無力さ、死生観等々の訴えかけてくるものの多さに胸が詰まりました。毎朝夕、通勤途上で何回となくそのありさまを目にしても、見慣れる・・・ということは全く無く、被災された方々の置かれた厳しい状況に思いを馳せました。

また、配属された大槌町役場で職員の方からその日の様子を直接伺うにつけ、生死を分けるものは何か、地方自治体で働く者としてどのような行動をとるべきか、とらなければならないのか、を考えさせられました。

「地震だ 津波だ すぐ避難！」は、まさに的確なキャッチフレーズだと思います。今回の災害は決して遠い所の出来事ではなく、国内の地続きな場所で起きた惨事であり、静岡県もいつこのような真っ只中におかれるかもしれない・・・ということを経験に銘じ訓練等にも臨んでいきたいし、県民一人ひとりやすべての市民が決して他人事とは思わないでほしいと感じました。

大槌町役場では地震発生後直ちに、町民を避難地に誘導する職員は外に飛び出し、庁舎内の来庁者避難に追われる職員等に分かれました。ご存知のように、対策本部を立ち上げ津波に遭遇してしまった町長以下の幹部職員や1・2階にいた職員35名の死者と行方不明者。屋上にあがり命からがら救助された20数名。その日は3月だというのにまだ雪の降る凍てつく日で、翌日のヘリコプターでの搬送による救助。

仕事をお手伝いした町民課では、課長以下4名の尊い命が奪われたそうです。現に在籍している職員のなかにも、本人が被災者であり自分以外の家族が行方不明の方もいらっしゃいます。折れそうな心を、日常の忙殺される業務で紛らわせている部分もあるようですが、励ます言葉はなかなか見つかりませんでした。

「私は生かされているから、一生懸命頑張る。」と職員からの切実な声を聞くと、胸が締めつけられました。誰がどう見ても住民の側に立って、毎日毎日、日付が変わるまで通常の何倍もの業務に追われているこの役場職員の姿に、これ以上「頑張って」や「ガンバロウ」との声かけは到底出来ません。震災の日から土日も1日も休まず、懸命に町のために身を粉にされている課長さんもいらっしゃいます。小さな町では業務内容も多岐に渡り、さらにここで震災からちょうど3ヶ月が経過し、ご不明の方々の死亡手続きが出来るようになったため、町民課の業務はまだまだ多忙を極めます。

大槌町での業務から、未だ行方不明の住民が多数存在している現状を反芻して仕事に専念することの難しさ、言葉の壁の克服と難問山積でしたが、貴重な経験をさせていただいて得たこの教訓を、今後、沼津市の防災に活かすことはもちろん、通常業務にも活

かして行きたいと考えています。

応募動機で「男女の異なるニーズに配慮した防災体制づくり」を検証したい、と臨んだ派遣業務でしたが、町民課業務に忙殺され避難所周り等も出来ず、実際の声を聞き及ぶには至りませんでした。

しかし、特に最終日に山田町の防災担当者が「県は物資の援助だけでなく、人的支援にも考慮してほしい」と言われたことが、強く印象に残りました。

近年稀にみる未曾有の大震災で寸断された情報網。「何も連絡が無いから大丈夫だろう・・・」という岩手県の安易な考え方は、非常に危険でありにわかには信じがたいものです。通常の業務でも、役場職員は手一杯な状況に加え、避難所での住民対応にも人手は必要不可欠です。地元住民の方々のお話等を伺うにつけ、日頃からの岩手県庁と市町とのあり方について、信頼関係を垣間見ることができました。

今回の派遣で担当した業務は、過去に経験のある仕事内容であったため端末機器の操作をマスターすれば、ほぼ滞りなく勤めることができました。

ただ、期間が短く引き継ぎに時間を要するため、できれば町民課は最低でも1ヵ月、理想は3ヵ月、半年と長期滞在をして業務を補助することが、より良い支援ではないかと思いました。受け入れ側も業務多忙のなかで頻繁に人が入れ替わるのは、余計な労力と時間をさくこととなります。ほんとうの支援とは・・・。やはり、相手のNEEDSを的確に捉えた形の援助が一番です。先方は、来る者は拒めません。「ありがとうございます」とおっしゃるだけです。

せっかくの「ふじのくに」のこの素晴らしい力を遺憾なく発揮できるよう、今後の支援のあり方は出来ることであればご一考いただきたい、と感じました。

人間の叡智は優れています。まだ淘汰されていない県や市町のひたむきな努力は、防災に強い街づくりのために住民を巻き込んで、早急に万全な対策が構築されることと思います。しかし「想定外」に起こりうることは多々あります。「想定」の上にあぐらをかきことなく、必ずや到来するその時。その「いざ」という時にどれだけ動ずることなく、最善の方法で住民の安全と安心を守ることが出来るのか。

「津波からの避難」という住民への意識醸成の達成感の高さはもちろんのこと、繰り返し、繰り返し伝えることで刷り込まれる意識のモチベーションを下げずに持続させ、それを行動に移せる環境の整備の両輪を、自治体が進めていかななくてはならないことを強く感じました。

また、危機管理の担当部署においては岩手県のように、県と市町の連携体制が脆弱な関係であってはならず、住民の生活を第一と考えれば見えてくるハード面だけでなくソフト面における非常時の確実な対応や、怠り無く連携できる仕組みづくりを進めてほしいと改めて感じました。

岩手の海岸線は沼津市から始まる伊豆半島西海岸の入り組んだ地形に、酷似していま

す。毎日遠野市から大槌町まで片道1時間を往復したその景色は、さながら戸田や天城の緑濃い綴れおりの山道から海岸につながる風景と同じなのです。

これから派遣される皆さんや地元役場の皆さんは、生活環境との戦いにもなり衛生面での不安や、梅雨の合間の暑さによる熱中症、食中毒等、体調管理も大切になります。

この報告書をもって「9泊10日のMISSION」は一応の終了をみます。しかし、被災地の一日も早い復興、日常生活の回復を片時も忘れることはありませんし、マスコミでの「大槌町」に関する報道には一喜一憂してしまいます。沼津市や静岡県の息の長い支援と、万が一の非常時を乗り越えることが出来たときこそが、このMISSIONの完了を迎えることになると思います。

今回の派遣でお世話になりました、静岡県危機管理部危機情報課長の近藤隊長をはじめとした第12陣の静岡県と他市町の職員の皆さま、特に大槌班の吉田班長以下6名の皆さまに、厚く御礼申し上げます。

冒頭でも述べましたが、快く職場を離れさせてくださった市民協働課 栗田課長以下課員の皆さま、諸般の手続きを行ってくださった関係各課の皆さま、そして良き理解者である家族や友人、全ての方々に感謝します。ありがとうございました。

時が止まったままの大槌町役場
(地震発生 14:46 時計の時刻は 15:16)

